（別紙２）

論文審査結果の要旨

氏名　渡邊克義

本論文で著者渡邊氏は，ポーランド語学の１分野である固有名詞研究の扱う対象のうち，主に現代ポーランド人の姓および名のそれぞれにつき，近年の膨大な研究成果を手がかりとして，文法学的および社会言語学的観点から，幅広く考察している。

まず序章においてポーランドにおける固有名詞学研究一般の研究史および人名学研究の現状が概観された後，現代ポーランド人の姓を扱った第１章の前半においては，1990 年代にポーランドにおいてまとめられた大規模かつ詳細な調査の結果が紹介される。続いて，この調査で示された 40 万強の，人口に比してかなり膨大な数に上る現代ポーランド人の多種多様な姓の「型」が渡邊氏によって詳細に分類され，それぞれの区分ごとに論じられる。「ポーランド起源」の姓については，意味および語形の「派生型」に基づく下位区分が設けられて分析され，方言との関係についても併せて考察される。「外国起源」の姓については，いずれの外国語起源であるかによる下位区分が設けられ，その際，たとえば翻訳借用による姓や，第２次世界大戦中にドイツ語化された姓などの諸問題についても併せて論じられる。ついで後半では，複合姓，呼び掛け（名乗り），女性姓，改姓等の姓に関わる主として社会言語学的な諸問題が幅広く示され，考察が加えられている。こうした分類，考察の作業の過程で，文法学的には，現代ポーランド人の姓の語構成論・形態論上の類型が明快に整理され，また隣接するポーランド史学・民俗学・社会学等の諸領域に関連する言語学上の研究課題が，数多く具体的に提示されることとなる。

姓に比べ種類のかなり少ない現代ポーランド人の名を扱った第２章でも，まず第１章同様，1990 年代の調査結果に基づく，起源の別に基づく名の分類と主に語構成論的な考察がなされる。次に，愛称形，ポーランドにおける現行法規上の命名規定，20 世紀および近年における命名の流行の推移（著名な実在の人物や文学作品の登場人物の名との関連の問題等にも言及される），現代における改名等のさまざまな問題が取り上げられている。

以上のように，本論文は現代ポーランドの人名の文法学的な類型化の作業を主軸とし，併せて人名に関連する広範な問題群の発見（解決には必ずしも至らない）にも力が注がれている。前者については，論旨は説得的であり今後の研究にも有益であると高く評価されたが，特に姓の起源に関するロシア語を始めとする他のスラヴ諸語との比較の視点の欠如等の欠点，その他，一部の記述の不正確さが指摘された。後者については，研究意欲を刺激する多様な魅力的問題群を発見したことは大きな功績であるが，たとえばポーランド・カトリック教会やかつての社会主義イデオロギーとの関連，ユダヤ人の人名等，論じられるべき重要な問題がいくつかまだ残されているとの指摘があった。しかしいずれの不備も本論文の意義を損なうまでには至っていない。よって本委員会は上記の優れた成果を考慮し，本論文が博士（文学）の学位に十分値するものと判断する。